
闘鬼神再生(裏話)

猫目石

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

闘鬼神再生（裏話）

【Nコード】

N9861S

【作者名】

猫目石

【あらすじ】

魍魎丸との闘いで折れてしまった殺生丸の剣、闘鬼神。

「もし闘鬼神が再生されたら???」その過程を小説に仕立ててみました。（＾o＾）

星空の下、奇妙な物体が飛んでいる。

三つ目の牛に乗った妙に惚けた風采の老妖怪が一匹。

老妖怪の名は刀々斎、刀鍛冶である。

その証拠に刀を鍛える大きな鎚つちを携えている。

「猛々、濟まんが鬪鬼神を捜し出してくれ。殺生丸の奴、折れちまったからって其処らに放り出してきちまったらしい。いくら折れたからって、あんな物騒な剣をそのままにしておく訳にはいかねえかな。何時、また、誰ぞが変な気を起こすとも限らねえしよ。」

刀々斎は、つい今し方、新しく打ち直したばかりの天生牙を当の殺生丸に届けてきたばかりである。

天生牙と呼ばれて、わざわざ殺生丸の許に出向いてやったのが三日前のこと。

その天生牙を武器として新しく鍛え直す為に要した時間が三日。

(それにしても変わったな、あいつ)

『あいつ』とは言わずと知れた殺生丸の事である。

まず、天生牙に呼ばれた事に驚いた！

まさか、こんな日が来るなんて刀々斎は思ってもみなかったのである。

二百年前、犬の大将に天生牙を託されて殺生丸の手に渡るようにはしたもの、あの馬鹿兄弟の兄ときたら……。

天生牙が斬れない刀と知った途端、怒り出し、もう一振りの刀、鉄砕牙を求めて西国を出奔する始末。

以来、好き勝手にあちこち放浪して鉄砕牙を探し回り遂に見つけ出したは良いが、異母弟と殺し合いの喧嘩の末に左腕を斬り落とされ、それで諦めるかと思いきや、トンデモナイ！

奈落から四魂の欠片を仕込んだ人間の腕を借り受け、再度、鉄砕牙を奪おうと挑戦すれど又も失敗。

三度目は竜の腕を使い、犬夜叉もろ共、自分には使えない鉄砕牙を叩き折らんと又もや挑んだ揚げ句、土壇場で風の傷を使いこなした弟に瀕死の重傷を負わされる結果となった。

尤も、あの時は初めて天生牙が自らの意思で結界を張り殺生丸を護つた事から天生牙が殺生丸を己の主人と認めた事が判明したのだが。

その後、何があったのか・・・。

次に殺生丸と遭ったのは、不肖の弟子、灰刃坊が打った鬼の剣、邪気塗れの闘鬼神を介してだった。

殺生丸の奴、あんな怨念^{まみ}塗れの邪気の塊みてえな闘鬼神をアツサリ手懐けちまった。

あん時はビックリしたなあ、もうっ！

そりゃあ、あの野郎の力（＝妖力）が凄いもんだとは承知してたが、まさか、あそこまで桁外れだなんて思いもしなかったもんなあ〜〜。

全くよお、性格は悪いが実力（＝妖力）に関しちゃ右に出る者がいない程ズバ抜けてやがる。

それで闘鬼神を手に入れたと思ったら、又もや犬夜叉との闘いを再開と来たもんだ。

何でも確かめたい事があるとか抜かしてよ。

んもうつ、犬夜叉は、打ち直した鉄砕牙の重さを持って余して持ち上げる事さえヤツトだってえのに困った兄貴だぜ。

唯でさえ滅茶苦茶強いのに闘鬼神を手にした殺生丸の強さときたら呆れる程で犬夜叉は兄貴にいい様にやられまくって殺されかける有り様だ。

悪いことに犬夜叉が変化しかけちまったんで仕方なく俺が火吹き
術で辺り一面を火の海にしてトンスラこいたんだっけ。

全く手間のかかる兄弟だぜ。

何だって、ああも仲が悪いんだ！

顔を見れば殺し合いの喧嘩だぜ。

何も仲良くしろとまでは言わないが、あんな生きるか死ぬかの喧嘩
をする必要はあるまいに。

弟の方の犬夜叉は犬夜叉で、もう礼儀知らずの乱暴者で、何かつて
えと手を出してきやがる。

俺は、一応、年長者だぞっ！

鉄砕牙絡みで何か困った事が起きるとすぐ訪ねて来る癖にしか然も教
えを請おうってえのに頭を下げるどころか、ふんぞり返りやがって
尤も兄貴みたいに、いきなり命の遣り取りにならないだけ、まだマ
シかな???

殺生丸だと問答無用の殺し合いだもんな。

昔は、あいつから逃げ回ったもんだ。

おまけに怖ろしく執念深いと来てる。

犬の大将は、一体、あいつにどういふ躰をしたんだ！！

一見、綺麗な顔してるが、あいつの妖気ときたら僅かでも触れたら
切れそうなほど鋭いんだぜ。

危なっかしくて側にも寄れんわい。

とにかく兄弟揃って物凄い意地っ張りな処はソックリだぜ。

三つ目の妖牛、猛々が搜していた物を見つけたらしい。

妖雲をたなびかせユックリと降下し始めた。

「フン・・・どうやら見つかったようだな」

月明かりを反射して闘鬼神の刀身が白く光っている。

真つ二つに折れたまま地面に投げ出された姿は弓折れ矢尽きた落ち武者のようで、以前の猛々しいまでの闘気に満ちた姿を知るだけに、一層、哀れさを催させる。

魍魎丸に叩き折られた衝撃のせいだろうか、禍々しいまでの邪気も今は形を潜めている。

妖牛から降りた刀々斎が折れた闘鬼神を拾い上げ懐から取り出した布に包み込み再び牛の背に乗って自分の塹へと戻って行く。

「考えてみれば、こいつは灰刃坊の形見でもあるんだな。あいつの最後の作品なんだしょ」

刀々斎の曾て（かつて）の弟子、灰刃坊。

腕は良かったのだが刀の斬れ味に拘り過ぎたが為に幼い子供を殺し、その血と脂を刀身に練り込み怨みの妖力を持つ刀を鍛え上げるという外道に走った弟子。

その余りにも非道な所業に遂に破門せざるを得なかった。

しかし破門されても一向にその性根は変わらず、結局、自らが鍛えた鬼の剣、闘鬼神の怨念に取り憑かれ命を落とす羽目になったのである。

それにしても殺生丸も罪な刀を打たせた物である。

灰刃坊の許に悟心鬼の首を持ち込み闘鬼神を打たせたのは殺生丸なのだから。

とは言え鬼の牙の刀を打つ事を喜んで承諾した時点で、最早、灰刃坊の運命は決まっていたのかも知れない。

外道の道に踏み込んだ刀鍛冶に相応しい末路と言つべきであろうか。

刀々斎がポリポリと頭を掻きながらボソツと呟く。

「まあ、天網恢々疎てんもうかいがいそにして漏らさずつていうからな」

《意味：悪人を捕らえる為に天の張る網は広く大きくて、一見、粗いように見えるが絶対に悪人をその網から漏らす事は無い》

火山地帯にある刀々斎の壱いち兼けん、工房が見えてきた。

万年、火を噴く火の山の火口付近に居を構える刀々斎の住居を兼ねた工房は大昔の恐竜の化石をそのまま活かした物で実用一点張りの代物である。

飾りもへったくれも無い。

猛々を外に繋つなぎ、やっと壱いちに戻かへってきた刀々斎に開口一番、声を掛けてくる者が！

ピヨ ン ピヨ ン ピヨ ン

「やっと帰ってきたか！刀々斎！ずっと待ち続けておったんじゃぞ！」

ノミ妖怪の冥加である。

一応、犬夜叉の家来ではあるがチョットでも危険な時は即座に主を見捨てて逃げ出す忠誠心があるんだか無いんだか良く判らない下僕である。

この冥加と刀々斎は殺生丸と犬夜叉の父である犬の大将、鬪牙王が存命の頃からの知り合いで俗に言う悪友という間柄である。

冥加が犬夜叉の許に居ない場合は、大抵、この刀々斎の壱いちに逃げ込んでいと思えば間違いない。

今回はどうやら行き違いになったらしい。

「来とつたんか、冥加。おめえ、まあ た、犬夜叉んトコから
逃げてきたな」

「ギクツ！（凶星）ひっ、人聞きの悪い！避難してきたと言わんかい！この頃の犬夜叉様はな、魍魎丸なんて化け物みたいな妖怪と渡り合っておられるんじゃっ。危なくて危なくて、とてもじゃないがお側になんぞおられるか！」

必死に弁解する冥加。

「まあな、何しろ、あの殺生丸が危つくやられそうになった位だもんな」

「な、何だとっ！あの殺生丸様がかっ！？」

冥加が血相を変える。

無理もない。

犬夜叉の異母兄である殺生丸の強さは並大抵ではないのだから。その殺生丸が危つくやられかけたとはっ！

「三日前、天生牙に呼ばれて殺生丸の処に出向いたのさ。あんな風
に呼ばれるなんて思わなかったがな。犬の大将に頼まれて、あいつ

に天生牙が渡るようにしたものの、まさか天生牙を打ち直す日が来るとは正直、思ってもみなかったぜ」

顎鬚あごひげを弄いじりながら話す刀々斎。

「なっ、何とっ！天生牙を打ち直したのかつ！？」

冥加が素っ頓狂な声を上げる。

「ああ、天生牙自身がその判断を下したからな。やっと、殺生丸も武器としての天生牙を持つに相応しい心境に到達したらしいぜ。詳しい経緯いきわづらひは後で酒でも飲みながらユツクリ話してやつからチョイと待つとれや」

刀を鍛える大鎚を壁に立て掛けおかしき盃を取り出す。
ゴソゴソとそこらの物を片付け布に包んだ闘鬼神を作業台の側に置くと今度は酒を捜し始めた刀々斎。

(エ〜〜〜ト、こないだ貰ったイモリの黒焼き入りのマタタビ酒は、何処に置いたっけな。あれは、そうそう、アソコに隠しといたんだっけか。側に置いとくと、直ぐに飲んじまうからな)

秘蔵の酒を持ち出して老妖怪二匹の積もる話が始まった。

ノミ妖怪である冥加にはイモリの血を二・三滴ほど酒に垂らして入れてやる。

チュウ~~~~~プハツ！（冥加の溜め息）

「まあ聞けや。三日ほど前に天生牙に呼ばれたって事は話したよな。犬の大将の牙から打ち出した天生牙と鉄砕牙は俺の作品の中でも傑作中の傑作でな。それこそ心血を注いで打ち起こした、謂わば、俺にとっちゃ子供みたいなもんだな。あの二振り（ふたふり）の刀とは何と言ったら良いのかな、心が通じてるのよ。俺は産みの親だからな。それで気は進まないが殺生丸の許に出かけたつつう訳さ」

トクトクと盃おかしきに酒を注ぎながら刀々斎は話し続けた。

「天生牙に呼ばれたのか。で、殺生丸様はどのような御様子だったのだ!？」

先を促す冥加。

「まあ、ぶっちゃけて言えば散々なやられ様だったぜ。妖鎧に穴は開いてるは、あちこち怪我だらけで。あいつが、あそこまで、こつ酷く（びどく）やられるのは珍しいんじゃないか!？」

「それに何より・・・闘鬼神が無かった」

グビツ、ズズズツ、盃おかしきを干す音。

「エエツ、あの鬪鬼神がかつ！あの悟心鬼とやらの牙で作られた邪気塗れの剣！」

冥加自身、鬪鬼神とは浅からぬ因縁があり鬼の剣の威力がどれ程の物が充分に知っていた。

「ああ、相手に叩き折られたらしいぜ。あの鬪鬼神を叩き折るんなら並の相手じゃねえ」

「命があっただけでも、めっけもんだぜ」

ボリッ、ボリボリボリ、イモリの黒焼きを齧^{かじ}る音。

「しかし、あの殺生丸だからな。そんな事、死んでも認めねえだろうがよ」

ボリボリッ、ボリボリッ

「それで天生牙に呼ばれた事を話して打ち直す為に此処に持ち帰ったのが三日前だった。殺生丸の許に出向いて、まず、驚かされたのが、あいつが、あの殺生丸が人間の小娘を連れていたって事だ。あ

の殺生丸がだぞつ、筋金入りの人間嫌いがっ！」

「なつ、何と、刀々斎！ 儂を担いでるんじゃないかな？ それには本当に本当の事が！」

「誰が嘘なんか吐くかい！ 本当に本当の事さ。このデツカイ目ん玉で確と（しかと）見てきたんだからな。人間の小娘、それも、かごめてえな娘っ子と違うぞ。やっと赤ん坊に毛が生えたような童女だぜ。一体、全体、殺生丸は何であくんなチツコイ小娘を連れてるんだ！？」

「しつ、信じられん！もし、それが真実なら儂は太陽が西から昇ると言われても頷いてしまいそうじゃ。あつ、あの殺生丸様が、人間を虫けらとしか思っておられなかった御方が！大体、あの御方は父君の墓を暴いて（あばいて）鉄碎牙を見つけ出した時も、かごめを平然と毒華爪で溶かしてしまおうとなされた位、冷酷非情だったんじゃないぞ。幸い鉄碎牙の結界で護られていたから無事だったものの。とにかく己に逆らう者は、人間、妖怪に限らず、一切、手加減なしで殺してしまうような情け容赦の無い御方だった筈。それが人間の童女を連れてるなんぞ晴天の霹靂（きれき）じゃっ！天変地異の前触れじゃっ！」

「ん〜〜まあな。俺もそう思ってたんだけどよ。その、りんつてえ娘っ子がどんな扱いを受けてるのかと見てたらな、身形（みなり）は、コザツパリしてるし、顔の血色も良いし、結構大事にされてるみてえなんだ。邪見なんぞ、チヨット、りん（りん）に悪態でも吐（つ）こうものなら殺生

丸に蹴り飛ばされてたんだぜ」

刀々斎が大きな目玉を更にギョロツと見開く。

「ホオ~~~~それは、それは。相当、大事にされてるようじゃな」

驚きつつも頷く冥加。

「今回、天生牙に呼ばれたのも、あの、りんつてえ娘っ子が拘わったからじゃねえのかな。あんなに無情だった殺生丸の心に慈悲心らしき物が芽生えたらしいや。だからこそ俺も天生牙を打ち直す気になったのよ。以前とは明らかに何か違ってたからな」

グビツ、グビグビ~~~~

「ウ~~~~ム、あの殺生丸様がなあ。一体、何があったんじゃろうなあ~~~~!?」

冥加が考え込む。

「それで天生牙を打ち直して。先程、届けてきたって訳さ。殺生丸の奴、相変わらず可愛気がねえ。いきなり冥道残月破を使いこなしやがって。性格は悪いが実力も才覚も大したもんだぜ。」

「お館様が生きておられたら、さぞ、お喜びになられたであろうになあ」

しんみりとする冥加。

「そう湿っぽくなるな、冥加。一時はどうなる事かと危ぶんだけどよ。あの馬鹿犬兄弟、兄は兄なりに、弟は弟なりに何とかなりそうだけ。流石にあのお館様の血を引くだけの事はあるぜ」

「ウム、ウムッ、そうじゃな、そうじゃったな、つい嬉しくてな」

冥加が涙ぐむ。グスン・・・

「んな訳でよ、天生牙を渡した帰りに折れた闘鬼神の事を思い出してな。あゝんな物騒な剣をそのまま放り出しく訳にはいかないからな。拾って持ち帰ってきたのさ。打ち直してやるうと思つてな。ホレ、あそこに布に包んであるだろ。見事なまでに真っ二つに折られてるぜ」

「しかし、刀々齋、打ち直すにしても繋ぎが要るのではないか??」

冥加が疑問について訊ねる。

「ん〜まあな。それが問題なんだよな。一応、殺生丸の剣なんだから、あいつの牙か爪でもあると良いんだがな。どうしようかな？ わざわざ、もう一度、あの野郎の許に出向くってえのものなあ。出来れば願い下げにしたいもんだぜ」

ポリポリと頬を掻きつつ思案に暮れる刀々斎。

繋ぎ・・繋ぎ・・つ・な・ぎ・・ンン!?アレレ・・!?!

「ア」~~~~~ツ!思い出したあ〜
~~~~~!」

「な、何じゃつ、刀々斎!いきなりデツカイ声を出すな、ビックリするではないかっ!」

「思い出したんだよつ、鬪牙王から何かの折に必要なになったら使えつて爪を預かったのをっ!」

「何と、それは本当か!?ならば以前、鉄砕牙が折れた時に、何故、使わなかったんじゃ?」

「忘れてたんだよっ！それに、あん時には犬夜叉が自力で竜骨精を倒して爆流破まで使えるようになったんだから文句はねえだろうが」

すっ惚<sup>く</sup>けた風采に相応しく行動まで惚<sup>く</sup>けてる刀々斎。

「馬鹿者！結果的にはそうだろうが、儂は、あの時、死にそんな思いをしたんだぞっ！」

「良つく言っぜ。おめえは、あの時、勝ち目が無いとサッサと犬夜叉を見捨てて逃げたろうが」

「ウグッ！」

竜骨精との闘いの折の状況をつぶさに見ていた刀々斎の言葉に言い返せない冥加。

「まあ、繋ぎも見つかった事だし今夜は夜っぴて飲もうぜ。明日っから闘鬼神の打ち直しに入るからな。どう見積もっても三日三晩はかかりそうだ。全く、天性牙を打ち直したばかりだってえのに次から次へと仕事が入って忙しくて溜まらないぜ。」

グビリ、グビグビッ！

こうして老妖怪二匹の酒盛りは白々と夜が明けるまで延々と続いた



のであつた。

刀々斎の見積もり通り鬪鬼神の打ち直しは三日三晩かかった。

朝から晩まで剣を打ち直す音が工房から響き渡る。

如何に刀々斎が気合いを込めて鬪鬼神を打ち直しているのかが良く判る。

天生牙や鉄砕牙と違い鬪鬼神は鬼の牙の剣である。

その邪気溢れる刀身を、大妖怪、鬪牙王の爪を使って繋ぐ事により、未だに強く残っている悟心鬼の怨念を封じ込めようと言うのである。謂わば、これは刀鍛冶としての刀々斎の技量を試される仕事と言つても過言では無いのであつた。

鬪鬼神と刀々斎との鬪いと言つても良いだろう。

カ            ンカ            ンカ            ン!

三日目の朝、鬪いは刀々斎の勝利で終わった。

新生鬪鬼神を手に朝日にかざして見れば以前の邪気塗れの刀身とは明らかに違う輝きが其処にあつた。

寧ろ凄みさえ感じさせる静かな鬪気に満ちた剣。

刀々斎は満足そうにその刀身を眺めるとそれを布で包み込み冥加を呼んだ。

「オ~~~~イ、冥加よ~~~~今から朴仙翁の処まで行ってくるから、おめえも付き合えや。」

「朴仙翁の処へ? 何しに行くつもりじゃ? 昔話でもしに行くのか?」

。ピヨ

ン!

「それも有るが鞆にする為の枝を分けてもらいに行くのよ」

荷物にシツカリ酒も加える刀々斎。

「鞆？では鬪鬼神に鞆を付けるつもりか！？」

冥加が驚いて訊ねる。ピヨ　　ン！

「まあな、以前の鬪鬼神には鞆が無かったが俺の打ち直した新生鬪鬼神には鞆を付ける。大体、刀剣類には鞆が付き物だぜ。灰刃坊も本当は鞆を付けるつもりだったんだろぅが悟心鬼ってえ奴の怨念に取り憑かれて其れ処それ処じゃなかつたんだろぅさ」

妖牛の背に飛び乗る刀々斎と冥加。

深い深い森の中、滅多に人も獣も訪れないような場所に朴仙翁が存在している。

静寂の中、聞こえてくるのは、唯、鳥の囀り（さえずり）のみ。

ピピツ、チチツ、ピチュ、ピチュ・・・

樹齡二千年の朴の木。

樹木は千年で仙気を帯びる。

況して二千年もの樹齡ともなれば神仙の域に達する。

こんな辺鄙な場所へんぴで、さぞ世情に疎とかろうと思つたらさにあらず、朴仙翁はこう見えて中々の情報通である。

自分自身は、この場所から動けないものの、この森にやって来る鳥達とのお喋りからあれこれと情報を仕入れているのである。

「オ~~~~~イ、朴仙翁~~~~！儂じゃ、冥加じゃ！刀々齋も一緒じゃぞお！」

冥加の呼び掛けに太い太い朴の木の幹に顔が浮き出てきた。  
ボコツ 齡二千年を経た樹仙の翁おきなの顔。

「冥加か、久し振りではないか。刀々齋までも一緒とは珍しい。一体、どんな用で来たのだ？」

殷々（いんいん）たる響きの深い声。  
重々しくも懐かしさを滲ませた朴仙翁の顔が二匹の老妖怪を暖かく出迎えてくれた。

この樹仙も、又、鬪牙王とは旧知の間柄であった。

「ヨオツ、相変わらず息災のようだな、朴仙翁。今日は頼みがあった、こうして出向いてきた」

元々、遠慮のない性格の刀々齋が、早速、単刀直入に用件から話し始めた。

「鞘にする為の枝を分けてくれねえか？ 朴仙翁。チヨイと訳ありの刀なんぞな」

「訳あり？ 儂の杖を必要とする程の刀が天生牙と鉄碎牙、それ以外にも存在するというのは？」

「んんんんまあな、今回は、どうしてもお前さんの杖から作った鞘が欲しいんだよ」

そう言うなり刀々斎は布に包んで持ってきた打ち上がったばかりの新生闘鬼神を取り出して朴仙翁に見せた。  
それを見た朴仙翁が不思議そうに刀々斎に逆に訊ね返した。

「それは、殺生丸の剣ではないか。以前、あ奴が、その剣を天生牙と一緒に腰に佩はいておったのを見た事があるぞ」

朴仙翁の意外な言葉に驚く刀々斎。  
肩に乗っている冥加も右に同じ。

「この剣を知ってるのか、朴仙翁。なら話が早い。この闘鬼神は悟心鬼って鬼の牙から俺の不肖の弟子が打ち起こした物でな。以前は邪気に塗れた怨念その物みてえな剣だったのよ。普通なら、到底持つ事さえ出来ない筈なのに殺生丸の奴ときたら易々（やすやす）と手懐けちまって自分の剣として使ってたのさ。あいつのペラボウな妖力と闘鬼神の組み合わせなら、まず誰にも引けを取らないと思ってたんだが、世の中、広いぜ。その闘鬼神を叩き折る奴が居たの

よ。それに驚いた事に、天生牙が俺を呼んでな、何事かと殺生丸の許に出向いてみたら、どうも、以前の奴と様子が違う。それで天生牙を打ち直す事にしたのさ、武器としてな。打ち直した天生牙を殺生丸の許に届けたのが三日前。あの野郎、いとも簡単に冥道残月破を使いこなしやがったぜ。それを見届けた帰りに闘鬼神を拾い上げて持ち帰り、新しく打ち直したのが、今、手に持つてる代物つつう訳よ。然も繋ぎに使ったのは闘牙王の爪だ。今じゃ完全に悟心鬼の怨念は封じ込められとる。となったら鞘を付けてやらなくちゃいけねえ。そんな訳で、お前さんの所までやって来たのさ。済まんが枝を分けてやってくれないか？」

刀々斎の説明に朴仙翁は、以前、殺生丸が己を訪ねてきた時の事を思い返してみた。

殺生丸、今は亡き大妖怪、闘牙王の長男。

普段は殆ど他者に頓着しないあの誇り高い若者が、半妖の異母弟、犬夜叉の事を訊きにやって来た。

その時、驚かされたのが人間の童女を連れていた事であった。

殺生丸の人間嫌いは徹底していた筈なのに何の違和感も無く自然に、あの、りんと言う少女を伴っていた。

まるで、それが、至極<sup>しごく</sup>当たり前の日常であるかのように。

あの童女のせいなのか殺生丸が身に纏っている妖気さえもが相変わらず鋭くはあるが、以前に比べれば僅かながら穏やかになっているのが見て取れた。

(フム・・・成る程な、さもありません)

「良かるう、刀々斎。枝を分けてやるう。して、殺生丸は今も、あの、りんと言う童女を連れておるのか？」

又しても朴仙翁の言葉に驚かされる刀々斎と冥加であった。

ピョーン！

「何だ、もう知ってるのかっ！折角、驚かしてやろうと思ったのに  
よっ」

「フフ・・・以前、殺生丸が儂に訊きたい事があつて訪ねてきた事  
があつてな。その時に酷く驚かされた。あ奴の性格から言つても、  
例え、問い質しても答えぬであろう事は明白。一体、あれはどうい  
う事であるうと暫し思案に耽つたものよ」

パキパキツ・・・ボコツ・・・幹から腕が出てきた。

「フ~~~~ン、まあ良いや。とにかく久し振りの再会だ。大いに  
飲もうぜ。色々と積もる話もある事だしよ」

ドンッ！

大きな酒壺さけつぼを取り出した刀々斎が用意してきた盃にトクトクと酒を  
注ぐ。

老妖怪二匹と御神木みかみとも言える樹仙との珍妙な酒盛りが始まった。

三者とも鬪牙王が存命の頃からの長い長い付き合いである。

当然、無礼講である。

遠慮会釈なく酒を注ぎ交わし長の無沙汰を埋めるべく昔話に花を咲

かせる。

「そう言えば、こつやってお前さんと会うのは天生牙と鉄碎牙の鞘にする為の枝を貰いに来た時以来だな」

盃に注いだ酒をグビリと呷りつつ刀々斎が、朴仙翁に話しかける。

「フオッフオツ、そうだな、いきなり現れて鞘にする為の枝を分けると言ってきた」

朴仙翁には口が無いので養分を吸収する根元に酒を注いでやる。  
地面に吸い込まれた酒は地中に深く張り巡らされた根元に到達しジワジワと吸収される。

この辺り一帯に朴仙翁の根は張り巡らされ謂わば結界を形作っている。

地面を通して伝わる振動、風を通して伝わる気配、それらが、朴仙翁に、侵入者が害のある者か、そうでない者かの情報を備じゆんに教えてくれる。

「最初は剣もホロ口の扱いだっただが鬪牙王の紹介だと言ったら、ヤツト、渋々、枝を分けてくれたよな」

イモリの黒焼きをボリボリ齧りながら刀々斎が当時の事を思い出して愚痴る。





朴仙翁が楽しそうに笑う。

それまで一度も自分の枝を誰かに分けてやった事は無かったが刀々齋の熱意に絆ほだされ初めて己の枝を分け与えたのである。

謂わば刀々齋の粘り勝ちであった。

それ以来、冥加も交えての付き合いが続いているのである。

彼らは皆、鬪牙王を通して知り合った仲であった。

「それにしても、朴仙翁よ。お前さんは、どう考える？ 殺生丸の野郎が連れ歩いてる、あのりんつてえ人間の娘っ子についてさ」

刀々齋は殺生丸に逢いに行つてからズ〜〜ツト頭から離れない忘れようにも忘れられない疑問を朴仙翁にぶつけてみた。

「あの人間の童女についてか？ その事は僕も気になっていた。しかし、何しろ、あの殺生丸の事だからな。あれ程の人間嫌いが一夜にして趣旨を変えらると思えんし、正直、どう考えるべきか悩む処だな。だが、これだけは言える。紛れもなくあ奴は鬪牙王の息子だと言つ事だな。人間の女を愛し、我が子と、その母を救う為に命を投げ出した父親の血を確かに受け継いでおると言つ事だ」

朴仙翁が、ふと遠い目をして、かの大妖怪の在りし日の姿を思い浮かべる。

実に男らしい男であった。

惚れ惚れするような自由闊達な気性、白晳の美貌、剣を握ればその腕前、天地に並ぶ者なく、妖力においても、又、右に出る者無しと讃たたえられた懐かしき友人。

「フン・・・やっぱり、そう思うか。でもなあ、犬夜叉の場合は、まだ判るんだが。あいつには前科もあるしな、でも、殺生丸の連れる娘っ子は、まだ、ほんの子供だぜ。それも、赤ん坊に毛が生えた程度と言つても良い位なんだぜ」

刀々斎が頭をブルブルと振って応える。

「今は、まだ幼いが人間の成長は早い。後、数年もすれば、あの童女も殺生丸と並んでも可笑しくない年頃になるであろう。儂の見る処、あ奴が、あの童女を手放すとも思えんが」

パキツ・・・

「朴仙翁、本当に殺生丸様は、その、りん、とか言う童女を連れておつたのだな。刀々斎に聞いてからズ〜〜ツと信じられなかったのだが。イヤハヤ、お館様が生きておられたら何と仰る事じゃろうなあ」

ピヨ　　ン　ピヨン・・・

冥加が刀々斎の肩で飛び跳ねつつ話に割り込んで来た。

冥加は鬪牙王の下僕であつた為、一際、亡き主に愛着が深い。

犬夜叉に家来として付いているのも生れ落ちたと同時に父を失つた犬夜叉を不憫ふびんに思ったせいもあるが鬪牙王に頼み込まれたからでも

あつた。

当時、既に少年期を脱しようとしていた殺生丸は妖力においても並の妖怪では、到底、齒が立たない程の強さを周囲の者に見せ付け、後見人の存在など、一切、必要としなかった。

鬪牙王がこの世を去ってから二百年の歲月が流れ兄は戦国最強の大妖怪として名を馳せ、弟の方は半妖ながら父の形見の鉄碎牙を使いこなせるようになっていた。

そして如何なる宿縁による物か同じ相手を宿敵として追いつけていたのであつた。

「驚きはするだろうが喜ぶんじゃねえのか？」

刀々斎が、盃みかじきに更に酒を注ぎながら冥加の問いに答える。  
朴仙翁も又、刀々斎の言葉に頷いてその答えを肯定する。

「そうであろうな。鬪牙王は人間である犬夜叉の母、十六夜姫に恋をして子供まで作った男。次男どころか長男までもが人間の女と一緒に居ると知つたら、さぞかし面白がるであろうよ」

こうして化け犬兄弟を酒の肴に老妖怪二匹と樹仙の酒盛りは延々と尽きる事なく続けられた。

朴仙翁から鞘にする為の枝を分けてもらった刀々斎は鬪鬼神の刀身に合わせ枝を削り漆塗りを施す。

天生牙の鞘が朱色の漆塗りである事から識別しやすくする為に漆の色は黒色と決めた。

漆塗りが終わると黒光りする鞘が確かな存在感を醸かもし出している。

仕上がった鞘に新生闘鬼神を収める。

見事な一振りの剣が精悍な表情を見せて静かに其処にあった。

刀々斎にとっても第三の傑作、新生闘鬼神が、此処に完全に再生した。

「コイツが必要になる時がいずれ来るだろう。それまで大事に預かっていてやるとするか」

そう、殺生丸がりんを連れて西国に戻る日が。

その日が訪れるのは、そんなに遠い未来ではない。

了

2006・9/18・(月)・作成

(後書き)

《第十八作目『闘鬼神再生(裏話)』についてのコメント》

この作品は 最後に天生牙の鞞の色についてドタバタさせられました。

アニメと映画では 天生牙の鞞は黒なんですが 原作の19巻の裏表紙には『赤』で表現されてるんです。

イヤ〜もう！ 慌てました！！！

大急ぎで鞞の色を修正入れました。

それから 以前の作品で同じく天生牙の鞞を黒と書いた部分も訂正。

最後まで アワアワさせられました。

2006・9/18・(月)

猫目石

当時のコメントです。

読み返してみると懐かしいです。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9861s/>

---

闘鬼神再生(裏話)

2011年5月12日09時54分発行